『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）　第１巻　第１号　1998年10月　117頁～134頁

民衆詩派の詩人・白鳥省吾「土の精神」考

千葉　貢

要旨

本小考は日本近代文学史上「民衆詩派」の主要な詩人の一人として明記されている白鳥省吾を育んだ家郷との関連や精神的な深層の考察をはじめに、中学生時代に創作した十数篇の作品を第一詩集としてまとめることなく、そのうちの二篇を約十五年後の大正十年九月、改題した上で第六詩集「憧憬の丘」に加えたという事実から省吾の心の綾について推論を試みた。即ち、中学校卒業後の明治四十年六月、「第二高等学校受験失敗」という初めての挫折がその後の創作姿勢や作風を一変させ、観念的な「幻想や感傷」を抑制しながら家郷や社会の現実に目を向けるようになり、「民衆詩」へと近づいていった過程について論及した。その上で今回入手した第五詩集『楽園の途上』（大正十年二月、叢文閣）の「はしがき」や「民衆詩派」と呼ぶに相応しい代表的な三篇を紹介し、その作品の解説と共に反近代的な省吾の「土の精神」やヒロイックなパトリオティズム（愛郷心）にういて持論を展開した。

一、はじめに

民衆詩派の詩人・白鳥省吾は宮城県栗原郡築館村（現在は町制）に生まれ育った人である[1]。そこは宮城県北にあって古くから交通の要衝であり、国や県等の行政機関の拠点都市でもある。街の郊外には奥羽山脈の秀峰・栗駒山麓を源とする迫川などの中小河川の清流が一大穀倉地帯を潤しながら北上川へと連なり、渡り鳥の飛来地としてラムサール条約にも指定・登録された伊豆沼や内沼が東方の町境に広がっている。これらの風景や伝統は百年ひと昔の如く継承され、今も猶悠久のときを刻み続けている。

当地の築館がいち早く官公庁の出先機関の設置地として重要な役割を担ってきたのは、地理的な条件に加えて歴史に育まれてきた文化的な土壌の然らしめたところであり、省吾の母校である築館中学校（現、

宮城県立築館高等学校）が「明治三十四年四月に旧制築館中学校は、県立宮城第三中学校栗原分校として創立され、築館小学校の校舎の一部を借用して開校し」、「明治三十七年四月からは県立宮城第五中学校として独立し、同年六月一日宮城県立築館中学校と改称した。省吾三年の時である(2)。」という教育機関の早期開設をも促したのである。

省吾は明治四十年（一九〇七）四月、第二回の卒業生として巣立ち、明治四十二年（一九〇九）五月、早稲田大学英文学科へと進学し、「坪内逍遙、島村抱月、片山伸、吉江喬松、五十嵐力」等の教えをうけ、「若山牧水、秋田雨雀、相馬御風、本間久雄」等と交友し、文学的な素養が錬磨され、さらには洗練されていったのだから、築館中学校に通っていた五年間の月日は郷土の風光を血肉化し、家郷の社会的な現状や人々の実情をその脳裏に灼きつけ、修得した知識に裏うちされながら「民衆詩派の詩人」への素地を醸成していたであろうことは想像に難くない。

省吾の郷里・築館は宮城県北の自然に抱かれた一大穀倉地帯であり、先進的な交流拠点都市である。省吾は郷土の申し子の如く「民衆詩派の詩人」としての道を歩いていくのである。その民衆や民衆詩について省吾の著作などを通して、それぞれ私なりに考察したことを述べてみようと思う。

二　「民衆」「民衆詩」への開眼

省吾の家郷は田園地帯であり、幾代かに亘る農家の生まれ育ちである。その出生について改めて記しておきたい。

白鳥省吾は明治二十三年（一八九〇）三月二十七日父林作、母きねの次男として宮城県栗原郡築館村字町屋敷四十七番地（町制は明治二十九年施行）に生まれた。母は同村高森の大場の出である。白鳥家は代々農家であるが、省吾の父林作は小学校の教師であり、農事は母のきねよが祖父母と共に作男を使いながら約二ヘクタールの田畑を耕作していた。林作は小学校の教師をしながら夜は青年達に漢字を教えていた。俳人でもあり「松華」と号していた。省吾も幼児からこういった学問の雰囲気の中で育っている(3)。

と伝えられているのだから、四季折り折りの農事に関わりながらも勉学に勤しむことをも怠らなかったであろう。従って、省吾の人間性や文才を育んだのはその血筋だけでなく、月日と共に織りなす農業の営みであり、季節の彩りである。省吾は継承されてきたその土地の風俗習慣を体得しながら、時の社会が引き起こす様々な事象にも関心を寄せながら自らの出自や位相を認識し、自覚していくのである。自らの出身や位相に加え、始祖や家郷に対する愛情と開眼が「民衆」意識

を確立させ、「民衆詩」の創作へと掻き立てたのである。

省吾の「民衆」意識は社会的な動向に促された階級意識や家郷に対する安易な同情、そして共感ではない。自らの血筋に秘められている生来（netive）の資質や、その土地で培われた才覚の結実が「民衆」の一人とならしめ、正直な感情の具現が「民衆詩」となったのである。即ち、家郷の人々と風土が省吾をして「民衆詩派の詩人」に至らしめ、日本詩壇の新境地を拓かせたのである。

省吾は家郷を離れても猶、創作の主題を家郷に求め家郷をうたうのである。そこに農民が出てきたり田畑が出てきたりするのは作風の必然である。決して時代の要請や社会の要求に迎合したものではなく、家郷への愛情、出自に対する愛惜の思いが漲り迸るからである。

家郷をうたう――農民の悲哀は省吾の痛みであり、大地の賛歌は農民との共感であり慰藉である。自然の生態を熟知している省吾は、安っぽい悲哀や賛歌を打算的に綴ったのではない。「民衆詩派の詩人」省吾は、農民や農村が自然の異変だけでなく、時代や社会に翻奔されがちな見逃しがたい深い関わりと現実を追求すればするほど、逆に時代や社会の渦中に陥っていく自らの出自と悲哀を自覚しないではいられなかったのではなかろうか。だから省吾の数々の創作は、家郷を離れて生き抜かざるを得なかった田舎者の苦闘の所産であり、同胞である農民への応援歌であり愛郷歌である(4)。

愛郷のうた――そのなかには歴史や伝統がもたらす不条理な圧力に喘ぎ、時代や社会、政治の意図に強いられる農民たちの現実が告発されたり、超克、あるいは救済すべき道理が説かれたりしている。省吾ひとりの力では如何ともしがたいけれども、時代は急転回しつつ社会は激動を重ねながら、それでも緩やかに民主化の方向へと歩き始めていたのである。従って、省吾の文学的な活動はそのまま民主的な人間性の発露であり、その原動力は郷土愛（patriotism）であった、と重ねて言いたいのである(5)。「民主詩派の詩人」と呼ばれている所以もまた家郷にて育まれた共同体意識や人間性、郷土愛に満ちているからであり、何よりも自らが「民衆」の一人であるという自我意識を貫き、我が「民衆」の実情や位相を熟知していたからである。

省吾文学の主題をなす「民衆」が、民主主義運動に加担し主役の如く呼ばれるに至っては、歴史的な動向や時代の趨勢、社会的な必然によって求められたからである。自らが「民衆」の一人であるという自覚に導かれて民主化への道を歩き続けたのである。省吾は民衆の解放を願いながら家郷の現実をうたい続けることによって民主的な思想を貫いたのである。そこに省吾文学の見逃しがたい素朴な特色があり、社会的な特異性と意義を秘めているのである。

省吾は、時代や社会に強いられ不条理な辛苦に喘ぐ我が身の如き「民衆」を熟知していただけに、自ずから民主化を希求したのである。省吾をして「民衆詩派」と呼ばれるようになった時代背景や社会的な状況、省吾の活動ぶりなども含めて文学史上の一端を改めて認識しておきたい。それは次の通りである。

三

大正六・七年頃から思想界・文壇を通じてデモクラシーの思潮が論議され、文壇には民衆芸術といふが如き主張が現はれた。この主なる原因は世界戦争直後、米国大統領ウィルソンによつて唱導された国際連盟や民主主義（デモクラシー）の新たな提議により、欧州大戦が独墺の軍国主義・帝国主義に対して、連合協商国側の平和主義・民主主義が前者を覆滅せしめたものとし、オートクラシーに対するデモクラシーが世界の与論となり、民族自決や小国勃興が、各々民意を代表する団体主義を以て政治に思潮に奔はれ来る傾向が見えたが、我が国の民主的思想も、吉野作造その他の人々によつて論壇に喧しくなり、ついでロシア革命からマルクス主義や社会主義・無政府主義・サンヂカリズム・ボルセヴイズム等、社会運動・労働運動に関する西欧思潮の紹介、啓蒙の運動が我が国に盛んになつた。その導火線ともいふべきものにこのデモクラシー思想がある。文壇の民衆芸術の主張はそれであり、詩壇の所謂民衆派もその派生的現象と見ることが出来る。この一派の中に目さるゝ人々は、百田宗治・福田正夫・富田砕花・白鳥省吾・加藤一夫・井上康文等であるが、この一派の人々は必ずしもデモクラシーの代弁を詩句によつてなしたのではなく、そこには旧き人道主義的傾向も、自由主義も、自然主義的大地主義・重農主義・郷土主義等をも含有してゐるのである。福田正夫は、大正七年に小田原で雑誌「民衆」を発行し、百田宗治は「民衆」発行前、大阪で個人雑誌「表現」を発行し、そこでホイットマンの詩によつて示唆された散文的な自由詩によつて民主的思想

四

を謳ひ、それに富田砕花や白鳥省吾も時々寄稿した。（中略）ついで福田正夫・白鳥省吾等は、ホイットマンの使途トラウベルを紹介し、その「オプチモス」を抄訳した。かくて、ホイットマン、カアペンタア、トラウベルの民主的思想の詩が彼等の詩の背後にその示唆ともなり後援ともなつた。が、ホイットマン的民主主義は吉田宗治に最も濃厚であり、福田正夫は寧ろ重農的に、又浪漫的に、白鳥省吾は自然的大地主義に、富田砕花はカアペンタアの影響が深く哲学的思弁をその詩の中に蔵してゐた。正夫には「農民の言葉」、宗治には「ぬかるみの街道」、省吾には「大地の愛」、砕花には「地の子」、加藤一夫には「民衆芸術線」の如き詩集及び論集が出た(6)。

と、『増補改訂　日本文学大辞典　七』（新潮社）にまとめられているように、「民衆」に託された意味合いや社会的な背景を想起することができ、「民衆」の位相を具体的に主張した代表的な人々のことなどがこれでほぼ理解されるであろう。従って、「民衆」という言葉はデモクラシー思潮と共に流布し認知されるようになったのである。

「民衆」の立場を自認した人々は、身近な現実を受容しながら実情そのものというべき実生活の体験や実感を卒直に告白したのである。その告白こそがデモクラシーの必然的にして原初的な挑戦であり、その内容こそがデモクラシーを希求した社会的な告発なのである。

大正四年（一九一五）七月に創刊した『表現』、同七年（一九一八）一月に創刊した『民衆』などを通して、率直な告白に掻きたてたのは

激動する社会に生きる自己認識であり、自我を生みだし活動を支える生命の神秘と尊厳に覚醒し強く愛惜するからである。創作意欲を貫いたのは自愛の心情であり、主題に対する利他愛の精神である。その作品の数々を私は「可惜命の文学(7)」と呼ぶのである。

ここでいう「民衆」とは作者自身の別称であり、「民衆詩派」とは文学史上の分類に過ぎないのである。作者や作品の分類、そして名称に拘泥するまでもなく作品の内容そのものに共感を覚えるのだから、過去を繙き未来を希求する上でも重要な素材であり必要不可欠な文化遺産なのである。それでは「民衆詩派」の代表的な詩人・白鳥省吾の作品について二、三篇例示しながら考察を加えてみよう。

三、「土の精神」考――その濫觴

白鳥省吾は大正二年（一九一三）六月、早稲田大学英文学科を卒業した。卒業論文は「エドガー＝アラン＝ポーの研究」だったという。省吾は明治四十二年（一九〇九）五月の入学以前、即ち中学生時代から『秀才文壇』『新声』『文章世界』などに投稿していたというのだから早くから文学活動を始めていたと言えよう。早大在学中には『早稲田文学』『新潮』『詩歌』などに寄稿するようになり、その作風にも新味が加えられて充実ぶりを窺うことができる。省吾自身の懐古談によると、

私が詩作を始めた明治三十九年（数え年十七歳）から、明治四十三年（二十一歳）までの詩は、詩集『憧憬の丘』（大正十年九月発行、金星堂）に収められている。郷里栗駒山を歌った「望嶽の賦」は雑誌『新声』（明治三十九年十月号掲載）のもので「山の幻想」と改題、選者児玉花外。また学校で習ったエジプトの感銘から生れた「エジプト巌頭に嘯きて」（明治三十九年『秀才文壇』五月一等当選、写真入り）は選者、中内蝶二。「埃及哀歌」と改題して詩集に載っている。要するに純粋に中学生時代に十数篇の詩作があり、そのうち数篇は投稿して活字となったのである。

投書は早稲田に入学してから「もう投書でもあるまい」と自省して止めたのであるが、上京して数ヶ月の間に『新潮』『文章世界』に投書し、蒲原有明選では「野石」の号で入選している。いまその中学生時代の一篇「望嶽の賦」を茲に掲げる。十月号に載っているのだから、五年生になりたての十七歳の夏の頃でも投稿したものであろう(8)。

と述べている。即ち、「望嶽の賦」と題する「この詩」は、創作してから、約十五年の歳月を経て第六詩集となる『憧憬の丘』（大正十年九月、金星堂刊）のなかに「山の幻想」と改題して収録したというのである。省吾はこの第六詩集『憧憬の丘』の「小序」と題するなかで、

この集には、私の憂鬱な青春時代を代表する二十歳前後凡そ五ヶ

五

年間の詩百篇を収録してある。これを編んで私はこれまでにない感銘に打たれた、全き孤独で詩作を続けてゐたその頃の私は、何等の発表機関を有せず、従つてその詩稿の大部分は、今日まで空しく筐底に埋れてゐた。それは光に現はれずに暗い地底に根を張るような日々であつた。今これらの詩を精覈するに、これまでの私の諸詩集と毫も遜色なきを知つた。喜んでこの集を世に送る所以も茲にある。この集の詩は内容形式ともに、なか〳〵に多種多様で、古典主義、象徴主義、自然主義の諸傾向を帯びてゐるが、私の歩るいて来た遠い各期間が、それ〳〵の趣致をもつて思ひ出ふかく私を動かす(9)。

（後略）

と述べているのだが、これから四十八年後の昭和四十四年（一九六九、八十歳）八月、『白鳥省吾自選詩集』（大地舎刊）のなかには『憧憬の丘』より一篇も採用していないのである。一編も収録しなかった第六詩集『憧憬の丘』について『白鳥省吾自選詩集』のなかでは、

この詩集は私の詩作の当初（一九〇六年、明治三十九年、十七歳）から一九一〇（明治四十三年、二十一歳）までの五年間の詩百篇を収む。詩作の系列から言へば最初のものである。いづれも実際の見聞そのものを歌つた自伝の一部ともいふべきもの、文語の定型詩から、象徴詩へ、口語自由詩へ、詩壇の影響そのまゝを語つてゐる。小型三五四頁(10)。

という解説を施しているだけであるが、第一詩集『世界の一人』（大正三年六月、象徴詩社刊）の「自序」には、「此の詩集に収めたる詩の三十三篇と散文詩十八篇は、明治四十五年の四月から本年の四月まで、丁度、満二ヶ年の作品である。」と添えているのだから、創作の順序に従ってまとめたとするならば、大正十年（一九二一）九月に刊行した第六詩集、即ち中学生時代に創作した作品をも加えた『憧憬の丘』こそが最初のものであり、第一詩集の意味を深くもつものと思われるのだが、省吾は中学校を卒業してから約十五年の歳月を経た後に刊行したのである。さらには晩年になる昭和四十四年（一九六九、八十歳）八月、『白鳥省吾自選詩集』（大地舎刊）のなかに『憧憬の丘』（既刊の詩集十五冊、未刊の詩集二冊）より一篇も採用しなかったのはどうしてなのであろうか。この要因について、省吾と同郷の現代詩人・菊地勝彦は、「白鳥省吾――詩集『憧憬の丘』考――」と題する論考のなかで、

詩集『憧憬の丘』における「鬱憂の田園」に思いを馳せていますが、この「鬱憂の田園」の延長線上にある「耕地を失ふ日」や「殺戮の殿堂」が、なぜ書かれなければならなかったのかを知るためには、どうしても白鳥省吾の中学生時代の作品についての考察が必要なようです。なぜならば、このことによって、第一詩集ともなるべきであった『憧憬の丘』が、第六詩集として刊行されなければならなかったことの根拠が明確になり、それ以後の省吾のあの何とも頗る「健全」な姿勢がよりはっきりとしてくるからです。

六

と指摘している[11]。さらには「詩人はいつでも現実において敢えて敗北を選ぶ者でなければならないからです。国家や社会に対する、「健全」な姿勢はいつでも拒否されなければならないからです。しかし、白鳥省吾は、この時期には、すでに現実においては立身出世を果たし栄光に包まれてしまっていたのです。」と続け、「詩のもっている本質」や「文学というものの本質」をも探求しようとして詳細に分析を加えているので大いに教えられた。ただ、人はたまたま生まれあわせた家の財産や親の職業などによって得られたものまでをも、まるで自分自身で身につけたかのように錯覚したり「立身出世を果たし栄光に包まれてしまっていた」ように見えたりするだけで、現実に対する若い感受性や社会に対する本人の自覚が思想を醸し創作へと掻きたてたのだということを見逃してはならない。――それでは「明治三十九年（数え十七歳）」の「中学生時代」に創作したという「望嶽の賊」（詩集『憧憬の丘』には「山の幻想」と改題して掲載）を記し、郷土に聳える「栗駒山」に対する血気にはやる少年の感慨と絶唱に触れてみよう。

望岳（ママ）の賊（「山の幻想」）

衣冠正しく髯白き
聖者静けく笑めるごと
北のみ空にそそり立つ
ああ栗駒の峰尊うと。
むかし諸册二神の
ペガサス高く嘶けば
清き息吹の凝りてぞ
成りて匂へるこの山や。

ここに千條（ちすぢ）の泉わき
岩根こごしく瀧吼えて
静寂（しじま）の薫る森茂り
湖、瑠璃の水湛ふ。

不断に奇しき香を放ち
遠く神風ふきめぐり
ここ三国の民鎮め
不言の教尊しや。

高き天人雲踏みて
神の小琴をかなづれば
幽玄、楽の音も清ら
仰ぐ人の子恍として
甘き理想に酔ひにけり。

むかし原始のアイヌ等が

七

葦生へ茂る水ぎはに
腥（なまぐさ）き血ににじみたる
石斧と戈（ほこ）を洗ふとき
崇高の峰を仰ぎしか。

ここに尊き神宿り
荘厳、光、輝きて
永劫（とこしへ）にこの世を照らすかな。

この一篇が「私が詩作し始めた明治三十九年（数え十七歳）の作品だというのだから、今日では満十六歳にして高等学校の二年生ということになろう。ここには「あまりにも幻想的であり感傷的である」という詩想が漂い、「幸福で夢見がちな中学生詩人の栄光と矜持と[12]」に溢れているという印象は否めない。だが、この作風は「明治三十九年（数え十七歳）」の「中学生」にしてみれば当然であろう。そして、創作順からすれば第一詩集に加えてもよさそうな一篇なのだが、約十五年後に、しかも改題して第六詩集『憧憬の丘』に加えたのはどうしてなのかしらと改めて思わずにはいられない。

――それは明治四十年（一九〇七）四月、築館中学校第五学年を卒業した後の六月、省吾は仙台の第二高等学校を受験したものの不合格になったという挫折――即ち「青春の蹉跌」を体験したのである。この体験が原因となって以降の作品との断層を生み出したのであろう。

八

だから受験前に創作した二篇の詩は、受験し不合格後に創作された第一詩集『世界の一人』（大正三年六月、象徴詩社刊）には加えられず、創作してから約十五年の後、改題の上に第六詩集『憧憬の丘』（大正十年九月、金星堂刊）に添えられたという理由が察せられるのである。「受験失敗」という省吾にとっては「人生における初めての挫折」であったのだが、この「挫折」からやがて「現実認識と心境の変化にこそ、その後の白鳥省吾を決定する、すなわち、民衆詩派詩人としての出発点が確認されうるのであります[13]。」と言われる所以もまた首肯できるのである。

白鳥省吾をして「民衆詩派詩人としての出発点」が「第二高等学校への受験失敗」という「青春の蹉跌」であったとするならば、むしろ己れを凝視し省みる上で絶好の機会となったのだと言えよう。なぜならば己れの素質や素性は机上で身につけた知識や学力だけでは計りしれないという証左である。「民衆詩派の詩人」白鳥省吾は「青春の蹉跌」によってそれまでの観念的な「幻想や感傷」を抑制しながら家郷の現実に思いを寄せ、生来の感性や地力（じりき）を発揮していくのである。省吾は、新しい知識の吸収や取得のみに固執しやすい「夢見がちな」少年の日々にあって、家郷の現実や社会の深層にも眼を向けるようになり、連綿と継承されてきた血脈の導きに呼応するかのように、農民が土を耕すかの如き民衆詩派の詩人へと甦っていくのである。

民衆詩派の詩人・白鳥省吾――家郷を愛することによって多くの人々に共感を得られるような作品を創作するようになり、多くの人々

に素朴な影響を与えつつ未来に生き続けていくに違いない。自らの家郷を軽蔑したり隠蔽したりして愛することのできない人が、どうして追憶を慈しみ思い出に佇むことができよう。人は皆、それぞれの家郷にて育まれたのである。省吾もまた確かにその一人であった――。

四、「土の精神」考――「揺籃の郷土」から

白鳥省吾の第一詩集『世界の一人』は早稲田大学を卒業した翌年の大正三年（一九一四）の六月二十二日に象徴詩社より自費出版し、翌年の二月一日には二舎書房より再版している。その「自序」の冒頭には、

> 此の詩集に収めたる詩の三十三篇と散文詩十八篇は、明治四十五年の四月から本年の四月まで、丁度、満二ヶ年間の作品である。一面から見ると是れまで自分の歩んできた凡ての芸術の精髄であると言つてもいい。
>
> 世界の一人といふ名は自分の生命に驚き静かに燃えるハムブルな今の心境に最もふさはしいものであつたからである。

などと記している[14]。前章にて述べた通り、後の第六詩集『憧憬の丘』（大正十年九月、金星堂刊）のなかにそれぞれ改題して収録したという「明治三十九年（数え十七歳）」の「中学生時代」に創作したという「望嶽の賦」「エジプト巌頭に嘯きて」の二篇の他、「要するに純粋に中学生時代に十数篇の詩作があり、そのうち数篇は投稿して活字になったのである。」というような「十数篇」のいずれをも、第一詩集『世界の一人』には加えなかったのである。その要因はすでに指摘した通り「第二高等学校不合格」という「青春の蹉跌」によって、「自分の生命に驚き静かに燃えるハムブルな今の心境に最もふさはしいもの」を見い出せるようになった精神的な進展があり、「ハムブルな今の心境」へと変化してきたことを承知したからだと思われる。

省吾のいう「ハンブル」（humble）とは「生命」に対する「驚き」と共に「謙譲・謙遜」、「謙虚」に受容し順応しなければならないという達観である。省吾は「生命」の神秘や深奥に開眼するまでに至った「今の心境」を告白し、菊地勝彦が看破した「健全な姿勢」や「立身出世を果たし栄光に包まれてしまっていた」という「中学生時代」に対する自省と訣別によって創作され、「満二ヶ年間」という短期間のうちに燃焼結実した作品の数々を第一詩集『世界の一人』へと昇華させ、「自費出版」を決意させたのだと思われる。省吾のいう「生命」に対する「驚き」と、「静かに燃えるハムブルな今の心境」とは、「青春の蹉跌」を克服すべき都会（東京）暮らしの日々によって醸しだされ、田舎育ちの素性をはっきりと自覚するまでに至り、「幸福で夢見がちな中学生詩人の栄光と矜持と」の甘えや陥穽からの脱衣と再生への旅立ちを決意したであろうことは想像に難くない。

省吾は十九歳になる明治四十一年（一九〇八）九月の上京以来、第

一詩集『世界の一人』（大正三年六月、象徴詩社）を初めとして、『天葉詩集』（大正五年四月、二舎書房）を経て、『大地の愛』（大正八年六月、抒情詩社）、『幻の日に』（大正九年三月、新潮社）と題する詩集を精力的に発表し、すでに「民衆詩派」の詩人としての地歩も固まりつつあった。そして、大正十年（一九二一）二月、第五詩集『楽園の途上』（叢文閣）を刊行し、九月には「明治三十九年（数え十七歳）」の「中学生」時代に創作したという二篇の詩を改題して加えた、第六詩集『憧憬の丘』をも刊行した。省吾は時に三十歳、東京での暮らしも十年を超え、長男の省一が誕生した年でもある。

省吾は第五詩集『楽園の途上』（叢文閣）のなかで激しく家郷を求愛し、東京暮らしの心情をうたうのである。そこにはいち早く文明開化を標榜しながら近代化を強いられ、近代化によってもたらされた現実的な葛藤や矛盾、陥穽などに対する告発や抵抗、そしてジレンマ、やる瀬なさ、歯がゆさなどの愛憎が隆起し、省吾生来の素性や地力が漲り迸っている。詩集『楽園の途上』は「近代化」と称する風潮に隠蔽された強権や強制、強欲に蝕まれていく都会生活者の悲哀と愛郷のうたによって構成されており、理想の「楽園」を希求する者の苦闘のうたの数々でもある。国家権力に迎合する「近代化」の風潮だけが肥大し続ける現実のなかで、かえって混迷する都会や疲弊していく家郷に対する愛憐と、やり場のない憤怒が「楽園」への「途上」を願わずにはいられなかったのである。

省吾の第五詩集『楽園の途上』は大正十年（一九二一）二月二十八日、叢文閣より刊行された。その「はしがき」のなかで、

一九一九年より一九二〇年に至る満二ヶ年間の詩八十一編を輯めて、『楽園の途上』を編む。凡て既刊の詩集『世界の一人』『大地の愛』『幻の日に』以後の最近の作を網羅す。（中略）

詩に実生活の印象を自由に平明に表現しようとするのが私の行き方である。この詩集のなかには、特に一地方の風物を歌つたものも多いが、私の其処に却て確たる根抵と深い喜びを感じてゐる、何となれば私は特殊の中に普通を見、実生活の一片は全存在を髣髴すると思ふからである。私は実感を伴はない漠然たる詩的空想を排する、現実こそ永遠への窓である。

私はまた自然と社会の一人としての『祈り』と『闘ひ』とが、詩を貫ぬく二大動脈であると信ずることは、八年前に出版した処女詩集『世界の一人』の自序に示した心境と今も変りがない。たゞ幾分の相違は、除々とではあるが、新社会建設の翹望が意識的に燃えて来たことである。詩はその楽園への途上の頌歌、賛歌でありたい。静かにして底力ある破壊の叫びでありたい。詩は現代から来るべき時代への一つの鎖でありたい。然しそはたゞ願ひである。そして斯うした主張は作品その物によつて示されざる限り、千万言を費すとも、此の場合には無益である、もとより、これらの詩篇は、共に地上に生くる多くの人々にとつて、余りに微少な捧げ物であることを私はよく知つている。

と述べ、この終りには「一九二一年一月、東京雑司ヶ谷にて　白鳥省吾」と記されている(15)。

ここには第一詩集『世界の一人』（大正三年六月刊）のなかで、「何よりも先に自分の生命に驚くことだ。世界のたつた一人の心持で懐かしい重みのある自然の中に溶け入るところに鮮やかな力が湧いてくる、真の健康がある。自然の存在は抱きしめるほど悲痛な喜びが滾々と溢れてくる、酔ひどれのやうな恍惚がある。それは自然の中にしみじみと祈る心持である。やがて自然の無限の上に跳ねかへる闘ひの心持である。『祈り』と『闘ひ』と融一した心持から真実のシムプリシテーが生まれる、自由でそして静かな諧音が生まれる。私の詩の源は其處にある。」などと、「一九一四年五月」に記した「自序」と同じような心情に溢れている。すでに七年余りの月日を経ているにも関わらず、猶も一貫し続けている要因は、「自然と社会の一人としての『祈り』と『闘ひ』」とを忘れず「融一した心持」をも失わずにうたい続けているからであろう。

日本の「近代化」は西洋文明の移植に等しく、その「近代化」を吹聴流布するために急ぐ中央集権化の象徴である都市、モデルとしての東京――「近代化」に伴う矛盾や弊害をもいち早く露呈した都市や東京。この東京暮らしのなかで眼の当たりにした矛盾や弊害に対する抵抗や批判、そして「祈り」や「闘ひ」の所産が「共に地上に生くる多くの人々にとつて、余りに微少な捧げ物」という「詩」なのである。しかし、「微少な捧げ物」に等しい「詩」と言えども「近代化」の矛盾や弊害を排斥する上で不可欠な、歴史的にして社会的な遺産であり新たな時代を構築するための教訓なのである。――省吾は目次に続いて「揺藍の郷土」と題する章を設け、その冒頭に「地上楽園」という「詩」を掲げ、郷土の人々や近代化の蔓延する都会の人々に「捧げ」たのである。

地上楽園

健やかな馬を
埋むばかりに積んだ夏草
露に濡れて刈りたての青々した匂ひ
若者等は歌ひながら
黎明の山を下りてくる。

通りゆく町では老若の妻や娘やが
水汲む手桶を擔いで
楽しく挨拶を交はしながら
朝の炊事のために遠い井戸まで水汲みにゆく。

若者等は草刈りの仕事のあひ間に心して刈り
百合や桔梗や撫子の一束を
この夏草の傍らに結んで帰ることを忘れない
そして町の娘等はこの花に目をとめて

花の一もとをねだることを忘れない。

みんなは力の限りよく働いてゐる
多くは善良な心を持つてゐる
それなのに間違つた制度で彼等を蝕ばましてはいけない
あゝ　彼等のゆく路を幸福に輝やかせよ
土地の憂ひや卑屈な両性関係を脱して
真に自由に美しい心を育てしめよ。

この一篇で始まる第五詩集『楽園の途上』は口語自由詩の数々によって構成され、民主的な要素や傾向がはっきりと示されている。乙骨明夫も「この年の他の作にも民主的傾向を多く見ることができるが、省吾の作では、民衆詩派の通弊と思われる叫びや観念性のめだたないのが特色となっている。大地の愛をうたう心はつねに省吾から離れようとしない[16]。」などと述べており、その主題の多くは家郷であり民衆の営みであることや作風の一貫性をも指摘している。

早朝の草刈りに勤しむ若い男たち、早朝の炊事のために水を汲む妻や娘たち――朝は新しい一日の出発であり、健全な精神と肉体が賦活し始動するときである。その健全さが漲ってるかのように「みんなは力の限りよく働いてゐる／多くは善良な心を持つてゐる」と称え、だから「間違つた制度で彼等を蝕ばましてはいけない」と思わずにはいられず、願いをこめて告白せざるを得なかったのである。

一二

民主的な言動の原点は現実の「制度」に対する「祈り」や「闘い」によって引き出され具現化する。省吾は家郷の現実を体得し熟知していたからこそ人間性の如くに書かしめたのである。私はその人間性の一端を「土の精神」と呼び、その「土の精神」は省吾ひとりのみに具備されたものではなく「近代人」を自負する人々のなかにも連綿と息づいているのである。

五、「土の精神」考――「現代の嵐」へ

町の鐘

ごーん、ごーん、ごーん、と鐘が鳴る
南の丘の杉薬師の鐘が鳴る
時ならぬこの鐘の音に
いままでの習慣から
町の人々は囁き交はす、
『誰か大病でがすぺね、誰だんべ』

隣から隣へ聞き合はして
誰さんが大病だと判(わ)かる
町のみんなは一銭銅貨を手にして
やつこらさと鐘の鳴る方へ
杉薬師の御堂の方へ急ぐ。

町の人が御堂に一杯になつて
蠟燭は花のやうに明々と点つてゐる
一銭銅貨は一人分の蠟燭代なのだ
みんなは大きい『自然』の前にぬかづいて
どうぞ病人が助かるやうにと祈る。

どん、どん、どんと太鼓が鳴る
花のやうな蠟燭はみんなの心のやうに揺れる
みんなは心を一つにして病人の為めに
家に帰るを忘れて祈る。

省吾もまた「町の人々」や「町のみんな」のなかの一人であり、「南の丘の杉薬師の鐘」の音を聞きながら「これまでの習慣」を体得してきたのである。その「習慣」に基づいて「大きい『自然』の前にぬかづ」く人間性、即ち、「土の精神」を育んできたのである。私はその家郷で血肉と共に身につけた「習慣」こそが真の教養であり、地力という名の生き抜く力であると言いたい。連綿と継承されてきた「習慣」は、家郷の人々が「習慣」にまで洗練し結実させてきた歴史があり、何ん代にも亘る多くの人々の思いが込められているからこそ教養の別称に等しく生き抜く力（地力）ともなり得るのである。「近代化」によって新しい事象が頻出する今日とて、安易に「習慣」を軽蔑し得ない、むしろ「習慣」に慰藉を覚え、「心の癒し」という安心立命の境地を求めるのは決して私ひとりではないであろう。――この「町の鐘」について、藤本寿彦は「大正生命主義と〈農〉のイメージ」と題する論考のなかで、

白鳥に「町の鐘」の造型に向かわせた心象には祈願としての風景のイメージが浮かんでいたらしく思われる。人倫に則した柔らかな習慣、一人の生命を〈町〉を構成する全てのものとして慈しみ合う美しさ――。そして、それこそがこの小世界を存在たらしめる心の紐帯であることが、白鳥の祈願として作品世界に息づいているではないか。

と述べた上で、「〈鐘〉はコミュニティーの象徴として、クロポトキンの『相互扶助論』にあらわれる。（中略）『町の鐘』にみられる相互扶助のイメージは『相互扶助論』の受容の上に架構された小世界と考えられる[17]。」と続けている。大いに教えられたのだが、藤本寿彦のいう「相互扶助のイメージ」は「南の丘の杉薬師の鐘」を聞きながら育ってきた省吾の習慣、あるいは教養が引き出されて「架構された小世界」である。詩として整理し構成美などに拘泥しがちなのは書物などから学びとった知識であっても、創作へと掻き立てるのはその教養であり人間性である。だから「町の鐘」の主題は、「〈土〉、〈人〉、〈種〉の三位一体となった生命世界が、〈農〉のイメージとして措定され、このような心象を抱き合う人々が生きる〈地上楽園〉こそが「町の鐘」

の世界なのであろう[18]。」という藤本寿彦の説明のように「農のイメージとして措定され」ただけではなく、むしろ訳の分からない「近代化」の風潮が蔓延し、独占的な資本主義や専制的な強権に翻弄されている時代や社会に対する告発でなくてなんであろう。

省吾は家郷にて体得してきた「みんなは大きい『自然』の前にぬかづいて」「みんなは心を一つにして病人の為めに」「家に帰るを忘れて祈る」ことを、「習慣」として継承し続けている人々の心持ちや町の現実を実感を込めていたったのである。うたった当時にしろ今日にしろ、いかにも非近代的で非合理的非科学的なことを、と一笑に付されるであろうが、「近代化」の別称に等しい進歩や開発、スピード化、画一化などによって「みんなは心を一つに」し得なくなった今日の発展ぶりのなかで、多種多様な疾病、疾弊、病理に冒されて醜態を曝けだし生き苦しさを訴えたり不本意な死を遂げたりする人々が増加してきたというのはどうしたことであろう[19]。今日の我々は「近代化」に包まれている開発、進歩、発展、スピード化、科学的、合理的、などの真意を究めることが責務であり、新たな「近代化」を「架構」するための闘いを始めなければならないのである。いつの時代の現実も未完成の社会であり理想への途上なのである。

省吾の第五詩集『楽園の途上』は自らの家郷だけでなく、社会全体の「途上」を感受し、その改革改善を願ってまとめられたのである。その「祈り」や「闘い」に目覚めさせたのが「揺藍の郷土」にて培ってきた教養である。だから家郷の風物や人々の姿がうたわれているけ

れども、その主題は決して「〈農〉のイメージ」や農村の解放だけではないのである。「町の鐘」が示唆しているように「大きい『自然』の前にぬかづ」いて、「みんなは心を一つにして病人の為めに」「祈る」ことの出来るゆおな心の紐帯をもつ社会の「架構」であると思われる。だから詩集『楽園の途上』にある冒頭の「地上楽園」は早朝の生命力を称え、「町の鐘」は一日の終りを告げる入相の鐘ではなく、非常時や焦眉の急を告げる白昼の鐘なのではないかと思う。能因法師が「山里の春の夕暮れ来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」（『新古今和歌集』春下）といたい、「寂滅為楽」を希求した入相の鐘ではなく、むしろ生命の息吹を求めて響き渡る早朝の鐘、白昼の鐘が新しい時代の到来を「祈る」人々の心とを重ねて「象徴」しているのではないかと思う。省吾は家郷を離れた東京暮らしのなかで社会の動向をも実感していたのだから、決して「揺藍の郷土」のみをうたったのではない。第五詩集『楽園の途上』の第五章には「現代の嵐」（一六〇頁以下）という見出しを掲げ「選炭の乙女」と題する一篇もある。

選炭の乙女

選炭するうらわかい乙女等よ
ガラガラと炭車からぶち開かれた大小の石炭を
一様にスコープを揮り石炭を選りわける
荒々しく鼓膜をやぶるほどの強い乱調子。

この音の渦巻、暴力の戦のなかに
力限り働く乙女等よ
私は彼等の殊勝さに涙をこぼす
あゝこれは都の乙女等を気絶させるに足る光景ではないか
骨の髄まで浸み入る石炭の匂ひ
美しい忍従の乙女等のうしろに
あらゆる華やかな都会の遊惰なパノラマが見えるではないか。

一日一円足らずの賃銀で
なぜ彼等のみ獣のやうに働かねばならないか
健康と性とを自ら蹂躙するやうに
なぜ斯う狂ほしく働けねばならないか。

「現代詩人」に関する永年の研究者であった乙骨明夫は「一九一九年の作品には、それ以前の作品に見られるよりも多く、民衆派的色彩がみとめられるが、もっとも注目されるのは『生活の礼拝』（『文章世界』一九一九・一〇）で、全篇のなかで『撰炭の乙女』がもっとも民衆派的である。」と述べ、続けて「名もない労働者のがわに立った主観性の強いうたいぶりは、民主的と呼ばれるにふさわしい[20]。」と評価しているのだが、民衆詩派や民衆詩に対する批判がなかったわけではない。省吾は「柳澤君は又、詩壇の民衆精神に数十言を費してゐるが、それは根拠なき漫罵に過ぎないから、それに就いて今言及する必要はない。」としながらも、「『労働者は醜い』と云ふやうなことを云つて居た」ことに対して次のような反論を試みている。

柳澤君がさう云ふのは唯美的の観念からであらうが、同時に世間の俗人が持つてゐる物質的の貴賤の評価から一歩も出て居ない感じ方だ。私自身の立場から云へば、私は必らずしも労働者を主題として詩を造らないのではあるけれども、労働者を只一口に「醜い」と言ひ去つて了ふのは可なりに皮相な浅薄な見解である。私は表面的に優艶の美人ではなくして、一見醜いものにも精神的、形態的により力強き美を見る時がある。労働者の如きその一例で、私はその人々を醜いと感ずるよりも人類の僚友の一人として湧くばかりの愛を持ち得るのである[21]。

これは柳澤健との労働観の相違を示すもので、私は省吾の見解に共感を覚えた。即ち、「労働者」という人間そのものや労働そのものが「醜い」のではなく、手足を動かす作業や所作に伴う方法や手段が「醜」く見せるだけであっても、その動きを「醜い」とすればそれは偏見であり愚考であり蔑視である。近代的な進歩観で喩えれば、厚化粧に加えて華美な服装を纏った人を美しいと見做しがちな虚栄心にも等しいのである。だから服装の如き「作業」に幻惑されて生命の継承にとって不可欠な労働の必然や、一回限りの命を惜しむ愛の本質について熟慮を避ける短絡的にして軽佻な見方であろうと思う。

一五

省吾は家郷の「南の丘の杉薬師の鐘」の音を朝な夕な聞きながら、その地方の「習慣」によって生き抜く力（地力）となる「教養」を培い、その「教養」が東京暮らしのなかで触媒し反応するかのように民衆詩と言われる数々の詩を紡いだのである[22]。その手法や主題、そして作風は家郷の農民が季節の推移に合わせて大地を耕やし、作物の育成に心血を注ぎ、自然の恩恵を「祈り」、そして感謝しながら紡ぎだす心持ちや暮らしと等しく、私は「土の精神」というのである。

省吾は第一章「揺藍の郷土」の終りに「郷土」という詩を掲げている。省吾は私のいう「土の精神」を自らの「揺藍」の日々より紡いできた歩みを回顧しているので紹介したい。

郷　土

私は生れた、丘の麓の古い家に
二月の明方に
雪の上を照らす黄金の太陽の下に
無心に大気を吸ひ光に触れ
母の乳を貪り吸つた。

あゝその誕生に祝福あれ
私は野や丘を兎のやうに駆けり
火を枯草に放つて歓呼し
山に木苺をとり谷に百合の花を折つた
私はおもふ過ぎし日の自然児の友達を。

わが友等と半日を土蜂と戦ひ
土中のその巣を掘り返へした
田植する我が家の人々に苗を撒き
野天の荒筵の上に共に昼飯を食つた。

あゝ山間の小さな村に
大気を濁らす一切の文明を知らず
汽車も汽船も煙突もない処に
力強い鼓動のまゝに生きた。

文字を知り恋を知り
美しき神秘の窓として少女を見た
そして大いなる声に呼ばるゝ如く
青春にして憧憬の都を見た。

あゝ胸躍る平安のふるさとよ
寂寞にちかき静かさを持ち
しかも一本の緑樹さへ烽火のごとく
空に靡びくを思ふ故郷の万象よ
汝にこそ人間の運命の推移や

大自然の呼吸を明らかに感ずることが出来る。

都会の泥土や煤煙の中に
私の魂は身ぶるひして輝き起ち
遙かに遠いふるさとに感謝する
汝こそ燦爛として輝く自然の
壮麗の母胎であり
私は其処から生れた。

省吾は西洋文明の日本化に等しい「近代化」の蔓延する東京暮らしのなかで、「あゝ山間の小さな村に／大気を濁らす一切の文明を知らず（中略）力強い鼓動のまゝに生きた」とか、「都会の泥土や煤煙の中に／私の塊は身ぶるひして輝き起ち／遙かに遠いふるさとに感謝する」などとうたったのは、平凡な懐郷心からだけではなく、家郷にて培ってきた「土の精神」が反応し、「文明」や「近代化」に対する懐疑心をも含まれているのである。「汽車も汽船も煙突も」と並び喩えられる可変的な「文明」や「近代化」は、ものの生産や獲得、拡大の「進歩や発展、開発」に努めてきたのだが、果たして何も喪失することはなかったであろうか。「文明」や「近代化」によって生きとし生けるものの生命を、水や空気、そして食料（糧）や労働、時間や性別などから解放し進歩させたであろうか。生命の自由を発展させ、死からの解放や自由を開発したであろうか。「進歩・発展・開発」などのためにかえって多くの死や断絶、喪失などを強制しなかったであろうか。生命は多くのことを可能にするけれども死はすべてのことを不可能にしてしまう。生命の継承を可能にするのが「文明」や「近代化」の真意ではなかったのか。

我が省吾の生涯は「土の精神」を抱いての「文明」や「近代化」との闘いであった。その闘いは「死」をもって断ち切られたのだが、新たな生命がまた闘いを挑み新たな時代を築くのである。生命は何かをするために授けられたのであり、明日は何かをするための新しい日である。我々は在りし日の生命を継承していることに感動し後の人々に受け継がれていくことを期待しながら、我が省吾の如く「揺藍の郷土」から「現代の嵐」へと闘いを挑む他はない。

（ちば　みつぎ・本学地域政策学部教授）

註

（1）白鳥省吾の略年譜については、千葉貢　一九九八　民衆詩派の詩人・白鳥省吾「土の美術」考、『NOVITAS』（高崎経済大学学会）第七号、右一五―三三頁を参照して戴ければ有難い。

（2）千葉與一郎　一九八六　省吾を育んだ郷土、『民衆派詩人・白鳥省吾の詩とその生涯』（築館町）六頁。

（3）註（2）に同じ。一頁、

（4）千葉貢　一九九八『田舎者の文学』（高文堂出版社）のなかの各小考を参照して戴ければ有難い。

（5）註（1）に掲げた小考のなかで「ヒロイックな愛郷心」について論述したので参照して戴ければ有難い。

（6）一九五一（初版）、一九六七（八刷）『増補改訂　日本文学大辞典七』

（新潮社）のなかの「民衆派」より引用。一〇五頁。

(7) 千葉貢　一九九一『可惜命の文学』（双文社出版）のなかの各小考を参照して戴れば有難い。

(8) 白鳥省吾　一九六四「民衆詩の出発点――吾が中学生時代の詩に就いて――」と題する追懐文を「特別寄稿」している。宮城県立築館高等学校生徒会誌『剛』第三号の六頁より引用した。猶、今回同誌のコピーを入手するにあたり、築館高等学校の教頭、熊谷一夫先生の御高配に与かりましたことを記し、感謝申し上げる次第であります。

(9) 今回この小考をまとめるにあたり省吾の第六詩集『憧憬の丘』（金星堂刊）を入手することが出来なかった。よって、菊地勝彦　一九九七『晩翠・省吾・亀之助』（アステップ）のなかの一〇八頁より孫引きした。

(10) 註（9）に同じ。一〇六頁より孫引きした。

(11) 菊地勝彦　一九九七『晩翠・省吾・亀之助』（アステップ）一〇七―一〇八頁より引用。

(12) 註（11）に同じ。一五四頁より引用。

(13) 註（12）に同じ。

(14) 今回この小考をまとめるにあたり省吾の第一詩集『世界の一人』（象徴詩社刊）を入手することができなかった。よって、乙骨明夫　一九九一『現代詩人の群像――民衆詩派とその周圏――』（笠間書院）のなかの「白鳥省吾論」二九五―三三二頁より孫引きした。

(15) 今回この小考をまとめるにあたり入手できたのが、省吾の第五詩集『楽園の途上』（叢文閣版）大正十年（一九二一）二月二十八日発行のものである。『楽園の途上』の「はしがき」や目次、詩の引用はすべてこの書に拠った。原文は正字体である。

(16) 乙骨明夫　一九九一『現代詩人の群像――民衆詩派とその周圏――』（笠間書院）三二一頁上段、「白鳥省吾論」より引用した。

(17) 藤本寿彦　一九九五「大正生命主義と〈農〉のイメージ――福田正夫、白鳥省吾をめぐって――」、鈴木貞美編『大正生命主義と現代』（河出書房新社）二〇一下段―二〇二頁上段にかけて引用。

(18) 註（17）に同じ。二〇二頁下段より引用。

(19) 去る平成十年六月十二日（金）付『毎日新聞』の朝刊は第一面に「経済苦の自殺急増」「昨年七年前の二・八倍」という見出しを掲げた上で「昨年一年間の全国の自殺者総数が、三年連続の増加で最近十年間で最多の二万四、三九一人（前年比六％増）に上ったことが十一日、警察庁のまとめで分かった。」と報じていた。

(20) 註（16）に同じ。三二七上段―三二七頁下段にかけて引用した。

(21) 白鳥省吾　一九五六　民衆詩の特質「現代文学論大系」（河出書房）第七巻、九七頁上段から下段にかけて引用した。この評論の初出は「詩壇に逆行する偏見を排す」と題して、雑誌『科学と文芸』の一九一八年六月に発表されたものであり、後に『現代詩の研究』（大正三年九月、新潮社刊）に加えられたものである。今回、そのいずれも入手できなかったので『現代文学論大系』から引用した。

(22) 中西進は『うたう』とは『訴ふ』だという。わが心情を相手に訴える様式が歌だと考えるのである。」と述べている。中西進　一九七五『神々と人間』（講談社現代新書）四八頁より引用した。

附記

この拙稿をものするにあたり使用しました白鳥省吾の著書や研究書等の購入、あるいは白鳥省吾の家郷・宮城県栗原郡築館町を中心とした近隣地域での資料収集や巡検等の費用には、平成九年度の高崎経済大学特別研究奨励金や高崎経済大学後援会より頂戴した研究助成金を活用いたしましたことを申し添え、関係各位の御高配に対し謹んで感謝申し上げる次第であります。

猶、築館町では「白鳥省吾記念館」を建設落成させ、平成十年七月一日より開館し、一般公開等の顕彰事業を行っております。